Human Rights

令和６年度

第43回　全国中学生
人権作文コンテスト

横浜市大会
作文集

横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会
横浜市・横浜人権擁護委員協議会・横浜市人権擁護委員会・横浜地方法務局

横浜市教育委員会

第43回
全国中学生人権作文コンテスト
横浜市大会作文集

はしがき

昭和二十三年（一九四八年）十二月十日に国際連合総会で世界人権宣言が採択されたことを記念して、毎年十二月四日から十日まで人権週間が設けられています。

これにあわせて、人権尊重思想の普及高揚を図るための啓発活動の一環として、横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会と横浜市教育委員会の共催で「全国中学生人権作文コンテスト横浜市大会」を実施しています。

本コンテストは、次代を担う中学生が人権問題についての作文を書くことを通じて人権尊重の重要性や必要性についての理解を深め、豊かな人権感覚を身につけることを目的としています。

本年度は、一二四校、五五、三二三編に及ぶ多数の作品が寄せられました。

コンテストに寄せられた応募作品はいずれも中学生らしいみずみずしい感性に富み、人権問題について自ら真剣に考えて意見を述べたものばかりで、応募された皆様の真摯な姿勢には心を打たれるものが

あります。

この作文集は、校内審査を経た三三三編から、一次審査で五二編、二次審査で五十編を選考し、さらに最終審査で最優秀賞、優秀賞に選ばれた二二編を収録したものです。より多くの方々にお読みいただき、身近な生活の中で人権尊重の輪が広がることを願ってやみません。

終わりに、コンテストの実施にあたり多大な御尽力をいただきました、審査に関わられた先生及び多くの関係者の皆様方に対し、心から感謝申し上げます。

令和六年（二〇二四年）十二月

横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会
（横浜市・横浜人権擁護委員協議会・横浜市人権擁護委員会・横浜地方法務局）
横浜市教育委員会

【審査講評】

第四三回全国中学生人権作文コンテスト横浜市大会に、市内一二四校から五五、三二三編の作品を御応募いただき、ありがとうございました。また、参加された各校の先生方におかれましては、熱心に御指導いただき、また審査にあたられましたことに厚く御礼申し上げます。

日頃の自らの体験を通じて感じたこと、考えたことを人権の視点から見つめ直し、一つの作品としてまとめ上げた中学生の皆さんの意欲と努力に心から敬意を表します。

応募作品のテーマは、高齢者や障害児・者、外国人、いじめや疾病など、幅広い分野から寄せられました。

作品の多くは、家族や友人、地域の人との日常のふれあいを通じての、ふとした気づきや心の動きを素直に表現しており、その感覚の鋭さに、はっとさせられる作品もありました。

中学生の皆さんが人権作文を書くことで培った「人権の視点」を、これからも永く持ち続けてくださることを願っております。

横浜市大会においては、校内審査を経た作品について、横浜市立中学校教育研究会国語科部会の先生方による一次審査、教育委員会事務局指導主事による二次審査を行い、最終審査で最優秀賞など各賞を決定いたしました。最優秀賞のうち、「『自分』も誰かにとっての『他人』」、「変えたい、今の現状」、「何気無い一言」、「人を平等に思い合うこと」、「妙子おばあちゃんの幸せを小さくさせないために」、「障がい者、そしてきょうだい児の人権」、「どう生きるか」、「誰でも自分自身を愛せる社会に」を神奈川県大会の優秀賞として推薦しましたことを御報告いたします。

審査員の皆様には、御多忙の中、審査に御協力いただきましたことに改めて御礼申し上げます。

最後に、この作文集が、中学生のみならず、広く市民の皆様が人権について考えるきっかけとなれば幸いです。

審査員長　小　林　千恵子

（横浜市人権擁護委員会　会長）

目次

はしがき
審査講評
入選者紹介……1

最優秀賞

●横浜市長賞
「自分」も誰かにとっての「他人」　横浜市立篠原中学校……三年　匿名……7

●横浜市教育長賞
変えたい、今の現状　横浜市立大綱中学校……二年　清水都……9
何気無い一言　横浜市立青葉台中学校……二年　吉岡美雪……12

●横浜人権擁護委員協議会長賞
「人を平等に思い合うこと」　横浜市立上白根北中学校……一年　碓井こころ……15
妙子おばあちゃんの幸せを小さくさせないために　横浜市立富岡中学校……一年　木村凛桜……18

●横浜市人権擁護委員会長賞
障がい者、そしてきょうだい児の人権　横浜市立南高等学校附属中学校…二年　石井翠…21
どう生きるか　横浜市立新田中学校……二年　盛田福…24
●横浜F・マリノス賞
誰でも自分自身を愛せる社会に　横浜市立篠原中学校……二年　矢部宮瑚…26
●横浜FC・ニッパツ横浜FCシーガルズ賞
6組「さん」と呼ばれて　横浜市立岩井原中学校……一年　小山優輝…29
●横浜ビー・コルセアーズ賞
後悔の無いよう、思いを伝えて　横浜市立緑が丘中学校……三年　酒井愛奈…31
●横浜キヤノンイーグルス賞
地球上のみんなで　横浜市立神奈川中学校……二年　伊藤恵美…33
●横浜DeNAベイスターズ賞
バリアをなくすために　横浜市立早渕中学校……三年　竹内花歩…36

優秀賞

きょうだい児が思うこと　横浜市立希望が丘中学校……三年　井川姫衣奈……38
人を想うこと　横浜市立戸塚中学校……二年　匿名……41
自分らしさを信じて　横浜国立大学教育学部附属横浜中学校…三年　岡倉心咲……44
二人のためにできること　横浜市立東山田中学校……三年　小野ももこ……47
全員が障がい者　横浜市立秋葉中学校……三年　佐藤芽依……49
イメージを大切にして　横浜市立秋葉中学校……三年　信夫心……51
平等な世の中で好きなものにふれる　横浜市立平楽中学校……二年　田中来実……53
一つで一人を決めないで　横浜市立荏田南中学校……三年　三宅結子……56
当たり前のない世界へ思いを馳せる　横浜市立中川西中学校……三年　森岡千智……59
耳栓に込めた願い　横浜市立岡津中学校……三年　山田駿……62

参加校紹介……64
応募状況……66

入選者紹介（敬称略）

最優秀賞（横浜市長賞）

匿　　名　「自分」も誰かにとっての「他人」……横浜市立篠原中学校　三年

最優秀賞（横浜市教育長賞）（氏名五十音順）

清水（しみず）　都（みやこ）　変えたい、今の現状……横浜市立大綱中学校　二年

吉岡（よしおか）　美雪（みゆき）　何気無い一言……横浜市立青葉台中学校　二年

最優秀賞（横浜人権擁護委員協議会長賞）（氏名五十音順）

碓井（うすい）こころ　「人を平等に思い合うこと」……横浜市立上白根北中学校　一年

木村（きむら）　凛桜（りお）　妙子おばあちゃんの幸せを小さくさせないために…横浜市立富岡中学校　一年

最優秀賞（横浜市人権擁護委員会長賞）（氏名五十音順）

石井　翠　障がい者、そしてきょうだい児の人権 …… 横浜市立南高等学校附属中学校　二年

盛田　福　どう生きるか …… 横浜市立新田中学校　二年

最優秀賞（横浜F・マリノス賞）

矢部　宮瑚　誰でも自分自身を愛せる社会に …… 横浜市立篠原中学校　二年

最優秀賞（横浜FC・ニッパツ横浜FCシーガルズ賞）

小山　優輝　6組「さん」と呼ばれて …… 横浜市立岩井原中学校　一年

最優秀賞（横浜ビー・コルセアーズ賞）

酒井　愛奈　後悔の無いよう、思いを伝えて …… 横浜市立緑が丘中学校　三年

最優秀賞（横浜キヤノンイーグルス賞）

伊藤（いとう）　恵美（えみ）　地球上のみんなで……横浜市立神奈川中学校　二年

最優秀賞（横浜ＤｅＮＡベイスターズ賞）

竹内（たけうち）　花歩（かほ）　バリアをなくすために……横浜市立早渕中学校　三年

優秀賞（氏名五十音順）

井川姫衣奈（いがわきいな）　きょうだい児が思うこと……横浜市立希望が丘中学校　三年

匿　名　人を想うこと……横浜市立戸塚中学校　二年

岡倉（おかくら）　心咲（こころ）　自分らしさを信じて……横浜国立大学教育学部附属横浜中学校　三年

小野（おの）ももこ　二人のためにできること……横浜市立東山田中学校　三年

佐藤（さとう）　芽依（めい）　全員が障がい者……横浜市立秋葉中学校　三年

信夫　心　イメージを大切にして……横浜市立秋葉中学校　三年

田中　来実　平等な世の中で好きなものにふれる……横浜市立平楽中学校　二年

三宅　結子　一つで一人を決めないで……横浜市立荏田南中学校　三年

森岡　千智　当たり前のない世界へ思いを馳せる……横浜市立中川西中学校　三年

山田　駿　耳栓に込めた願い……横浜市立岡津中学校　三年

入賞（氏名五十音順）

秋生　瑶季　名前が伝える人権侵害……横浜市立中川西中学校　三年

天野　志保　今の自分にできる事……横浜市立谷本中学校　一年

瓜谷　康佑　知って寄り添う……横浜市立老松中学校　二年

大垣葉奈加　「当たり前」の定義……横浜市立名瀬中学校　二年

小川　依真　「違い」は自分を豊かにする……横浜市立すすき野中学校　一年

小澤友弘　たとえ見た目や形がかわっても……横浜市立鴨居中学校　二年
金山泰志　違いを認め合う……横浜市立城郷中学校　三年
鎌田彩莉　心のゆとりは優しい言葉になる……横浜市立中川中学校　三年
工藤君代　自尊と人間尊重の社会……横浜市立山内中学校　三年
小出琴　お互いに理解して、生きる……横浜市立新田中学校　一年
坂井明莉　言葉のかたち……横浜市立岩崎中学校　三年
匿名　多様性への道のり……横浜市立田奈中学校
四戸結莉　正しい知識で実現「多様性」……横浜市立荏田南中学校　二年
清水緋菜　時代をつくろう……横浜市立汲沢中学校　三年
清水実桜　かけてあげたい言葉……横浜市立高田中学校　二年
鈴木浄大　「差別」と「区別」……横浜市立西本郷中学校　三年
多々見咲希　「自分らしく」生きること……横浜市立松本中学校　一年

デディオス珠奈（じゅな）　八十億分の一……横浜市立汐見台中学校　一年
長谷川登生（はせがわとうい）　世界が優しさに包まれるために……横浜市立老松中学校　二年
原田（はらだ）　安珠（あんじゅ）　「卑弥呼のようになりたい」……横浜市立六ツ川中学校　一年
平川（ひらかわ）　柚希（ゆずき）　「知ること」から始めませんか……横浜市立東永谷中学校　二年
舟山（ふなやま）　絢華（あやか）　ズボンとスカート……横浜市立名瀬中学校　三年
三井（みつい）　璃杜（りと）　「自由な表現」……横浜市立岩崎中学校　三年
水上（みなかみ）　朋紀（ともき）　自分の見た介護問題……横浜市立日限山中学校　三年
森田（もりた）　大翔（ひろと）　「亡き祖父に会いたい」……横浜市立桂台中学校　三年
山口（やまぐち）　結愛（ゆいあ）　自分は世界で一人だけ……横浜市立万騎が原中学校　二年
吉井（よしい）れいな　学校に行くのはもうやめた……横浜市立富岡東中学校　二年

最優秀賞（横浜市長賞）

「自分」も誰かにとっての「他人」

横浜市立篠原中学校　三年

匿　名

私が小学校低学年の時、クラスメイトのAさんがいじめられていた。毎日のように、陰口を言われたり、服が少しかすっただけでも嫌な顔をされたりしていたのだ。ある日、私の友達がAさんの悪口を言っていた。そこまで共感していたわけではなかったのだが、嫌われたくないと思い「確かに。」と賛同してしまった。すると、友達はいつも以上に嬉しそうに「だよね。」と言ってくれた。仲が深まった気がしたのを今でも覚えている。その日から、私も悪口を言うようになった。だが、いじめているという感覚は全くなかった。Aさんは、よく誰かとケンカをしていて、今思うと最低な考えだが、皆に嫌われているのはその子のせいだと考えていたのだ。皆の顔色にも、罪悪感は見えなかった。だが、徐々に嫌がらせがエスカレートしてくると、私は「こんな事をされたら誰でも怒るよな。」と思うようになった。友達も同じ事を思っていたようで、「あの子が怒ってるのって、嫌がらせされてるからだよね。」と言い、その後は陰口を言わなくなった。

クラスの人達も、段々と嫌がらせをしなくなり、その子へのいじめは、いつしかなくなった。しかし、月日が経つにつれ、私の心には罪の意識がどんどん強くなっていった。きっかけがあったわけではないが、ふとした瞬間「なぜ、あんな事をしてしまったのか。」と後悔するようになった。

進学して、私はクラスの人に嫌がらせを受けるようになった。聞こえるように陰口を言われたり、嫌な噂を流されたりした。初めてそれに気付いた時、数年前の自分を思い出した。想像した事は何度もあった。前に、私が陰口を言っていたAさんの気持ちを。だが、自分がされて初めて分かった。想像以上に傷付いた。悲しかった。まるで、自分には味方がおらず、一人ぼっちのように感じられた。同時に、「私は　こんなひどい事をしてしまったのか。」と過去を悔んだ。とても辛かったが、「過去に人をいじめていた身だ。他人に同じことをされても、仕方がない。」そう思い、気付かないふりをして過ごした。

数ヶ月経ち、気付けば嫌がらせはなくなっていた。私は周りに助けを求めなかったが、今はそうしても良かったかなとも思っている。私は、「自分はいじめられても仕方ない。」と考え、我慢していた。だがそれでは、陰口を言っていた頃と同じく、「いじめられている人が悪い」という考えになってしまう。そうすると、この世に「いじめられていい人」が存在する事になる。しかし、それは間違っている。生まれながらに平等な私達の中に、いじめられていい人なんていない。私達全員が大切にされなければならないのだ。だから、その一員である、自分自身も大切にすべきだと思う。

もし、今いじめられて悩んでいる人がいるなら、こう伝えたい。あなたは絶対に悪くない。自分が悪いとしか思えない状況でも、あなたは大切にされなければならないと。自分を大切にする事は、他人を大切にする事に繋がり、いつしか互いに尊重し合える社会を築く事ができる。

私がした事は、許される事ではない。一生背負っていかねばならない事実だ。だが、だからこそ私は、同じ過ちを繰り返さないためにも、他人も自分も大切にするべきだと思う。他人の事は自分の事のように、自分の事は他人と同じくらい、もしくはそれ以上に大切に考える。こうして温かな社会を育んでいきたい。

最優秀賞（横浜市教育長賞）

変えたい、今の現状

横浜市立大綱中学校　二年
清水（しみず）　都（みやこ）

私は生まれつき吃音という言語障害を持っている。私の三つ上の姉も小さい頃に吃音が一時的にあったが、現在は吃音の症状はない。姉妹なのになぜ私だけ吃音が残ったのだろう。

一般的に百人に一人が吃音者だと言われている。吃音になるのは遺伝という説があるが、はっきりとはわかっていない。

私の話し方が皆と違うと感じたのは幼稚園の年長のときだった。思うように話せない。皆と一緒に遊びたいのに輪に入るのが怖い。声をかけてみると友達が笑ったり、私から逃げる。どうして私のことを避けるのかわからないまま、人と接することに消極的になり、気づけば私の周りに自分が安心して話せる友達は一人もいなかった。小学二年生の夏、父の仕事の関係でアメリカに行くことになった。そしてそこで様々なことを経験した。信頼できる友達に出会った。何事があっても自由で楽しそうに暮らしている人々を見た。私の話し方が変でも笑ったり、バカにしたり、その事に触れないでくれた。そして一人一人、相手を大切にしている様子が印象に残っている。アメリカ生活で私は吃ってもいいんだという気持ちを知った。しかし、人生は順調には進まない。帰国して学校に通い始めた小学五年生の秋、いきなり不安が押し寄せた。自己紹介の時、先生に質問さ

れたことに答えようとしたら皆の前で吃音が出てしまった。出た時間はいつもより倍に長く感じた。直ちに教室から逃げ出したかった。皆が面白がる光景を自分の目で見たくなかった。それに小学六年生のときも、先生から生徒に私が吃音者だということを伝えてもらったのに、変わらず笑われた。英語の授業でペアワークをしていたとき、ペアを組んでいる子が「どうしてアアアアイライクってなるの。」と笑いながら聞いてきた。私はその質問に対し、泣かないように我慢しつつ、「わからない。」と彼に答えた。今でも彼が笑った姿は鮮明に記憶に残っている。

中学校に上がってから自分の吃音に向き合う時間が増えた。次第に吃音を直したいと強く思うようになった。母がネットで調べてくれたり、学校の先生に相談してくれたので、様々なことを経験することができた。一つは、一ヶ月に一回、特別支援学校の通級に通うようになった。そこで吃音の本を読んで理解を深めたり、先生と一緒に楽しく言葉のゲームをする。そこには勿論吃音者の子もいる。私にとって同年代の吃音当事者と話すのは初めてで、通級は一つの落ちつける場所となった。二つ目は、言語訓練に通い始めたことだ。言語聴覚士である先生本人が吃音者だった。私の目標は完全に吃音をなくすことだが、第一ステップとして流暢性形成法という、言葉の出にくさを和らげるための訓練をしている。腹式発声をすることで得意ではない音も一発で出てくる、私にとっては魔法のような練習方法だ。三つ目は吃音者との交流会に参加できるようになったことだ。二回ほど参加した。頻度は半年に一回くらいだが、吃音者に対する思い、体験談を教えてくれてとても力になるし、勉強になる。そのときにいつも話題になるのが「注文に時間がかかるカフェ」、略して「注カフェ」だ。聞いたことがある人もいるだろう。それは高校生からバイトができるカフェで、全国で開催されている。接客をしたくても自信がない吃音者がチャレンジすることができる。自分が客として行ったのだが、ス

タッフから沢山のアドバイスをもらった。一番心に残っているのは、「吃音が原因で失敗してもそれは貴方のせいではないからね。自分を責めないでね。」と言われたことだ。その言葉を聞いたときに世界が広がったように感じた。

現在、学校や通級の先生に調整をしてもらい、クラスでの発表はせずに違う形で評価してもらっている。クラスメイトから「発表しなくていいな。」と言葉をかけられることがあった。でも本当は、いつの日か前に立って皆と同じように話したい。授業で自ら手を上げたい。意見を言えるようになりたいと思っている。私の吃音は完全には治らないということも聞いているが、少しでも良くなりたいと毎日もがいている。誰もが学校で楽しく、不安もなく過ごせるように、吃音について皆に知ってもらいたい。私はクラスメイトに自分の気持ちや、症状のことを話したい。後になって伝えておけばよかったと悔いの残らないよう、一歩踏み出してみようと思う。

最優秀賞（横浜市教育長賞）

何気無い一言

横浜市立青葉台中学校　二年
吉岡美雪

夏になると心が少し暗くなる。熱い太陽と生ぬるい風と共にあの時の記憶がよみがえって来る。

小学5年生の時だった。次の授業が体育だったため私は一人で外に出た。校庭に行くと仲の良い友だちが私を待ってくれていた。私はその友だちのいるところへ走っていき、隣に並んだ。

「行こ。」

友だちはそう言い、私の手に触れた。その時だった。

「みゆきちゃんの手、何かめっちゃ濡れてる。変なの。どうしたの。」

自分でもかなり気にしていたことを言われ、何と答えればいいのかが分からなくなってしまった。

「いや、これ何か手汗が出ちゃうんだよね。冬よりも夏の方がたくさん出ちゃって。」

勇気を出して私は伝えた。けれど、

「何それ。きたな。」

私の答えに友だちは笑っていた。私も一緒に笑ったけれど、本心は笑うことが出来なかった。「きたな」その言葉がその後の授業中もずっと頭の中に残っていた。私は目から涙がこぼれそうになるのを必死でこらえた。

私は手掌多汗症という手汗が多く出る病気を持っている。最初の頃は何か物などを持ったときに手がぬれているな、と少し思うくらいであまり気にしていなかったけれど、友だちに何か言われたりすると周りの目が少しずつ気になるようになってしまった。そして人と手をつなぐことが怖くなってしまった。

中学2年生の今年、自然教室でキャンプファイヤーをすることが決まったのを聞いて、とても嬉しくて楽しみだった。けれどダンスをするときに人と手をつなぐのがもちろん怖かった。隣の人は誰だろう。また誰かに「きたな」って思われたらどうしよう。そう私はずっと思っていた。

そんなある日、友だちと遊んでいるときに手をつなぐときがあった。手をつないだときには何も言われなかった。私は何かを握ると手汗が出てしまうため服で軽く拭いた。だが、その時だった。私の耳に思ってもみなかった言葉が入って来たのは。

「わたしの手、そんなにきたなかったの。」

友だちが真剣な顔でそう聞いてきたのだ。私は一瞬何を言っているのかがよく分からなかった。

「ほら、だってみゆきちゃん毎回私と手をつないだ後、服とか何かで手を拭いているから私の手がきたないのかなって思って。」

友だちがそう言ったのを聞いて私は手掌多汗症だと言うこと、そのせいで手汗が出てしまい、手を拭いていたということ、その二つのことを友だちに伝えた。また笑われてしまうと私は思った。しかし、このまま友だちに誤解されたまま一緒に話すことがなくなるのがもっといやだった。だから伝えた。けれど私の耳に入ってきた言葉は私が予想していた答えとは違っていた。

「あっ、そうだったんだ。わたしてっきりわたしの手がきたないのかと思ってた。教えてくれてありがとう。」

私はそう言われたときに気づいた。あの時と言ったことはそんなに変わらないはずなのに返って来た言葉は「きたな」から「ありがとう」に変わっていたことに。そして私は何より私の体質を受け入れてくれる人がいるということを知ることが出来た。そう思うと嬉しくて泣きそうになってしまう。それにその言葉のおかけで心が少し前よりも軽くなった気がした。

手汗のことで今まで流した涙は決して少ないとは言えないけれど、今私は学校生活を楽しく過ごせていると思う。それは話を聞いてくれる人、寄り添ってくれる人がいるからだと思う。私も学校や学校以外の場所で困っている人や助けがほしいと思っている人に優しく話しかけたり、手助けをしていきたいと思った。だから私は辛い日々が私や友だちに来たとしても、互いに寄り添えるような関係でいたい。そして何より何気無い一言が人を傷つけてしまうということを忘れずに、とても大切な友人関係を日々の中でこれからもつくっていきたい。

最優秀賞（横浜人権擁護委員協議会長賞）

「人を平等に思い合うこと」

横浜市立上白根北中学校　一年
碓井（うすい）　こころ

私の母はパニック障害を患っている。パニック障害の特徴は、人が多く身動きが取りにくい状態になると突然動悸や呼吸困難、めまい等の発作を繰り返しやすくなることだ。そのため、発作への不安が増して外出等が制限されてしまう。

先日も一緒に出かけた時、混雑した特急列車が来たのだが、その列車には乗れなかった。母は申し訳なさそうに「次の各駅列車に乗ってもいい？」と聞いてきた。母は長時間立っていると体調が悪くなる事も多く、優先席ではない席に座れる列車を選ぶのだ。テーマパークに行っても、アトラクション等の長い列に並ぶ事も出来ない。もっと身近なことだと授業参観で四十五分間、多くの保護者の中で立ったまま参観することも大変だったそうだ。また直ぐに外に出られないような閉塞した空間に長時間居ることは困難であるため、例えば高速道路を走行したり、飛行機を利用しての旅行は難しい。母の日々の暮らしは、私と同じ日常を送っているように見えていたが、そうではなかった。母はいろいろな事を我慢したり自分なりの対策を考えたりしていた。母は電車内で自ら優先席に座る勇気はないそうだ。それは車内放送でアナウンスされる「高齢者の方、身体の不自由な方、妊娠されている方や、乳幼児をお連れの方に席をお譲りください」という言葉にあてはまらない

のを気にしてしまうからだ。私はこの放送の内容を何とも思わなかった。

母は外見からは障害を持っているようには見えない。障害というと盲目の方が白杖を持っていたり身体が不自由で車椅子を利用していたりと外見から直ぐにわかるものが挙げられやすい。車内アナウンスにある高齢者、身体に不自由がある方、妊婦さんも見てすぐわかるが、母はそのように見てすぐわかる障害ではない。私はそこで一見障害があるようには見えないが日常生活で困難を抱えている人がいることを知り、母のような障害をもった人にとっては、公共交通機関等は居心地が悪い空間なのだろうなと感じた。

この話を聞いた後、私は書店でパニック障害や不安障害の人へ向けた書籍を見つけ、またその書籍が沢山ある事を知った。その時「こんなに母と同じような障害を抱えている人が多くいるんだ」と思った。私は母からこれらの話を聞いていなければ外見からは判断しにくい障害を持っている人がいる事を知らなかっただろう。

以前私が見たニュースの記事に「電車の優先席に若い男性が座っていた際、高齢者の方がその男性に席を譲ってほしいと語気を強めた」と書いてあった。私はその記事を読んで「確かにそうだな、譲ってあげればいいのに」と無意識にその男性を健常者だと決めつけ、高齢者の方が優先されてもいいはずだと思ってしまった。しかし、外見を見ただけでは分かりづらい障害を持っている方がいることを知り、今までのように外見で優先される事があるかそうではないかを無意識に判断しないことが大切だと気がついた。記事の高齢者の方がもし、外見では判断しにくい障害をもっている人がいるのを知っていたら、このような言い方はしなかったのではないか。そのため多くの人に外見からでは分かりにくい障害者がいることを知ってもらうことも大切だと考えた。

今私に出来ることは、例えば電車の優先席で一見何か優先されることがなさそうな人が座っていた時でも、

「何か事情があるのかな、体調が悪いのかな」等と全ての人を平等に思うことだと考えた。中には、不自由な事がなくても優先席に座って席を譲らない人もいるだろう。だから優先席に座っている人全員を平等に思うのは難しいが少しでも相手を思いやることが出来て、自分優先で行動しないだけでも良いのではないか。大多数の人が困難なく出来ることでも、全ての人が出来るとは限らない。自分や多くの人が出来ることだと思い込み、物事を進めたり、強制することはその人を尊重していないことになる。外見から判断せず相手を想い、今相手が必要としていることを分かる努力をしたい。まずは自分自身が出来るようになりたい。そしてそのような人が増えたら、お互いを尊重し合える事に繋がるのではないか。

このような事をするだけで一人ひとりの心が温かく、みんなが生きやすい世の中になるのではないかと思った。

最優秀賞（横浜人権擁護委員協議会長賞）

妙子おばあちゃんの幸せを小さくさせないために

横浜市立富岡中学校　一年
木村凛桜

私には妙子おばあちゃんという九十三歳のひいおばあちゃんがいる。半年に一度しか会わないけど、会うといつも元気で、大声で、「こんなにかわいいひまご達がいて、おばあちゃん幸せ」と言っている。

人権とは、「一人ひとりがかけがえのない人間として尊重され、幸せに生きる権利」だと習った。人権作文のテーマに「高齢者問題」があったが、妙子おばあちゃんは会うといつも幸せだと言っているし実際に幸せに見えるのではじめは何が問題なのだろうと思った。でもこのテーマが気になった。幸せと言っている妙子おばあちゃんが時々切なそうに見えたからかも知れない。

妙子おばあちゃんは耳が遠い。声が大きいのは、他の人も大きな声じゃないと聞こえづらいと思っているからかもしれない。でも、周りは皆「もっと声を小さくして」と言ってしまう。妙子おばあちゃんは「そうか、分かった」と素直に答える。昔、補聴器を買ったけれど今は付けていない。雑音が大きく聞こえて嫌らしい。それなのに周りは「会話しづらいから補聴器をつけて」と言ってしまう。

妙子おばあちゃんは八十歳位まで元気にスイミングに通っていたと自慢げに話してくれる。でも今はもう一人で買い物にも行けない。スイミングにいた証明を残したいから名誉会員になっているけど周りから「もう行

かないなら退会しなよ」と言われてしまう。

年をとると出来ない事が増えていく。赤ちゃんは最初は出来ない事ばかりだけど、出来る事が増えていく。年をとることは逆だ。とても怖いことだと思う。怖い時に周りの人が気持ちによりそってくれなかったら…。できないことをだめなことのように考えて接したら…。「かけがえのない人間として尊重されている」とは言えないのかもしれない。

これは「いじめ」とは少し違う感じがしたので、何が違うのか考えてみた。皆と違って何かが出来ない人に、そのことを馬鹿にして自尊心を傷つける行為はいじめだ。この時、相手が出来ないことは初めから分かっている。妙子おばあちゃんに「声を小さくして」と言うのは少し違う。昔のイメージが残っているから聞こえづらいことを忘れてしまうのだ。馬鹿にしたいわけでも自尊心を傷つけたいわけでもない。いじめと違って、自然に、気付かないうちに、悪気がなくても高齢者を傷つけてしまう事がある。相手は自分ができないから悪いと思ってしまうのではないか。

年をとって自分でできることが少なくなるにつれて、わがままを言ったり、自分らしさが出せなくなることは、幸せが小さくなっていくことのように感じた。できることが少なくなるのは辛いけど、自分らしさを出せないことはもっと辛いことだと思う。そう考えると幸せを小さくする原因の一つは家族や周りの人の関わり方かもしれない。大切な人なのにとても悲しい。私は妙子おばあちゃんに何ができるだろう。妙子おばあちゃんが補聴器を付けないのには理由があった。雑音が大きく聴こえるのがとても嫌だから。スイミングの名誉会員で居続けるのにも理由があるはずだ。友達との思い出や、新しい泳ぎが出来るようになった達成感、タイムが縮まった時の喜びを忘れたくないのかもしれない。人が行動するのには理由がある。他の人からみたらおかし

なことでも、健康で、これからも出来ることが増え続ける人にとっては、「もったいない」とか「こっちの方がいいのに」と思うものも。少し想像しただけで色々な可能性を思いつくのに、どうして言葉を口にする前に想像力を働かせなかったのだろう。

妙子おばあちゃんはどう思うんだろう?それはなぜだろう?自分の当たり前を押し付けないで、もっと想像しながら会話したり、一緒にいたい。きっとクイズみたいで面白いと思う。できることは減っていくかもしれないけど、おばあちゃんらしさまで減らしたくない。それに思い出は増やすことができる。自分らしさを発揮してもらう機会を作れば、我慢しなくなるかもしれない。昔話を聞くのが良いかもしれない。会う機会は半年に一度じゃなくていいし、電話だってできる。妙子おばあちゃんの幸せが年をとっても小さくなることがないように。

最優秀賞（横浜市人権擁護委員会長賞）

障がい者、そしてきょうだい児の人権

横浜市立南高等学校附属中学校　二年
石井　翠

私は最近、「きょうだい児」という言葉を知りました。みなさんはこの、「きょうだい児」という言葉を聞いたことがありますか。「きょうだい児」とは、病気や障がいのある兄弟姉妹がいる子どもたちのことを指している言葉だそうです。私には難病・知的障がい・運動障がいの三つを抱える兄がいます。つまり私は「きょうだい児」ということです。そこで、私は「きょうだい児」という立場に興味を持ち、詳しく調べてみることにしました。

まず、調べて分かったことは、私のような「きょうだい児」という立場の人は世の中にたくさんいるということです。そしてその境遇について悩んでいる人がいるということも分かりました。例えば、（障がいのある）きょうだいばかり優遇されることへの不満、親が亡くなった後に（障がいのある）きょうだいの面倒を見ることへの不安、（障がいのある）きょうだいのことを恥ずかしく思うなどの、負の感情を抱いてしまうことへの罪悪感などがあるそうです。その点私は、障がいのある兄の妹として生まれてきていて、兄とのこの生活が生まれたときから当たり前だったため、兄に対し嫉妬や拒否感を覚えることはあるませんでした。しかし、調べた中にもあった「障がい者であるきょうだいがいることを周囲の人に打ち明けることの難しさ」について

は何となく共感を覚えました。

小学生の頃、友人と話していて家族構成の話題になったことがありました。そのとき私は友人に、「私には障がいのある兄がいる」と告げました。また、兄との日常生活についても少し話しました。するとそれを聞いた友人は驚き、兄のことを馬鹿にするように笑ってきました。もちろん、そんな風に馬鹿にしてくるような人ばかりでないことは分かっていますが、私はその体験がトラウマで、未だに友人に兄のことを話すときにはためらいを覚えてしまいます。

このような体験をしたことがある中でも、私の中で「きょうだい児」であることに対する変わらぬ想いがあります。

まず一つ目は、「きょうだい児」であることで、障がい者や障がい者を取り巻く環境、介助者やそれらに伴う課題などについてたくさん知ることができたことへのありがたみです。そして、この日々の経験を自分の中に留めず、障がい者の人が困っていたら助けたり、障がい者のリアルを周囲の人に伝えていきたいという想いがあるということです。ただ、そのためには互いが互いを尊重する必要があります。そこでみなさんに知っておいてほしいことがあります。それは「自分の家族に障がいがある」ということを打ち明けるのには勇気が必要であるということです。家族という大切な存在を、障がいのことで笑われたり馬鹿にされたりするショックはとても大きいです。それでも障がいについて、兄について、自分について知ってもらいたいから勇気を出して打ち明けています。そのことを忘れずに後ろめたさを抱くことなく胸を張って、「自分の家族には障がいがある」と伝えられるように私たちきょうだい児の話を受け止めて聞いて下さったら幸いです。

そして二つ目は、兄への誇りです。兄は難病も知的障がいも運動障がいも抱えていますが、生存率十数パー

セントの状態から復活し、今もこうして幸せに暮らしています。このことを考えると、生きていることが当たり前ではなく、命がどれだけ尊いものなのかを改めて実感します。だから、障がい者も健常者と同じ人間であり、みなさんと同じかけがえのない命を持っているということを覚えておいてほしいです。

この作文を書いている横で兄が母に遊んでもらっています。兄は本当に楽しそうに笑っていて、家族みんなも笑顔になることができます。そんな人の幸せを、人が侵すようなことがないよう、私は障がい者のためにできることを少しでもやり、障がい者への偏見をなくせるように周囲の人に正しいことを伝えていきたいです。

最優秀賞（横浜市人権擁護委員会長賞）

どう生きるか

横浜市立新田中学校　二年
盛田（もりた）　福（ふく）

「部活に勉強、沢山頑張って疲れたのかな？今は体調大丈夫ですか？」

これは、祖父から届いた最後のラインメッセージだ。この翌日、祖父は急逝した。心筋梗塞だった。まさか、死ぬなんて思っていなかったから、

「大丈夫だよ。」

たった一言のそっけない返信が、祖父とのやりとりの最後の言葉になってしまった。

僕は小学校の卒業式の前夜、激しい頭痛と嘔吐に襲われた。救急外来で、大きな病気の疑いがあるかもしれないといわれ、点滴を打ちながら一晩過ごした。幸い、大きな病気ではなく、重い片頭痛ということが分かったのだが、翌日の卒業式をとても楽しみにしていた祖父は、この時、僕のことをとても心配していたそうだ。

この一件以来、祖父は僕の体調をとても気づかってくれるようになった。体調を心配するラインメッセージも頻繁に届く。当時の僕は、その有難さに気づけなかった。

祖父は昔からとても優しかった。いつも、僕や兄のことを気にかけてくれて、一番の味方でいてくれた。学校の長い休みに祖父母の家に遊びに行くのが大好きだった。祖父は色々な所に連れていってくれて、沢山の体

験をさせてくれた。数えきれないほどの思い出が残っている。どんな時も、僕や兄の幸せを願い、支えていてくれたことに気がついた。それなのに僕は祖父に感謝の気持ちを伝えることができなかった。

「いつもありがとう。」

あの最後のラインメッセージが来た時、その一言を伝えればよかった。学校のことや友達のこと、サッカーのこと、頑張っていることを伝えたかった。そんな後悔がずっと心の中にある。突然命を奪われた祖父の死から時が経つにつれて、考えるようになったことがある。それは一日一日を大切に過ごすということだ。大切に、とはとても難しい。毎日楽しく過ごせているか?当たり前のように自分の側に居てくれる人に感謝を伝えられているか?人にやさしくできているのか?夢を叶えるために努力しているのか?そう振り返ると、やはり一日一日を大切に過ごすことは難しいことだと思う。

命の長さは平等ではない。それは、この世の中で一番の不平等だと僕は思う。そして、その不平等をなくすことができるのは自分自身だけなのではないだろうか?人の幸せは、命の長さではないということ。限られた人生の中で、どう過ごすかが大事であると思う。僕たちが親から授かった命は、一人一人に幸せになる権利がある。病気の人でも障害がある人でも高齢者でも、すべての人に平等に与えられた権利なのだ。その権利を行使するかどうかは自分次第である。

そして、一番大事なことは、幸せになるために努力し、頑張っている人を決して否定したり、馬鹿にしたりしてはいけないということ。僕は充実した人生を過ごすために一日一日を大切に生きていく。そして、今度は僕が誰かを気づかい、はげまし、支えてあげられるような人になりたい。

祖父が僕にしてくれたように。

最優秀賞（横浜F・マリノス賞）

誰でも自分自身を愛せる社会に

横浜市立篠原中学校　二年
矢部宮瑚

私は人の人権を奪ってしまうことは、すごく簡単なことだと思う。たった一言、たった一度の行動で人の人権を奪ってしまうことはできるからだ。そこが問題なのだ。

私はデュアン症候群という障害をもっている。デュアン症候群とは千人に一人の頻度で発症する、とても稀な目の病気で物が二重に見えたり、目を上手く動かすことができない病気だ。私は小学生の頃、そんな目とそんな障害を持った自分が大嫌いだった。だがあることをきっかけに、私は自分自身をどんどん愛せるようになっていったのだ。

私は小学校生活の約二年間をいじめで苦しんできた。いじめられていた理由は私が皆と違うから、私が障害をもっているからだった。また私のはじめてできた友達でさえも、私が皆と違うということを知ったとたん、無視をし始めたり、仲間はずれにしてきたのだった。当時の私はなぜ自分だけがこんなにもいじめられているのかが、よく分からなかった。しかしある日、学校からの帰り道で「何で皆と違うの？」、「その目気持ち悪いよ。」と言われ、私がいじめられていた原因は自分の目や障害にあるとその時、はじめて気付いた。その瞬間、目の前が真っ黒になった。私はその日、その瞬間から自分の目と自分自身が大嫌いになってしまった。そ

して自分自身にあった人権が一瞬で奪われ、無くなってしまったように感じた。ところが四年生の春、唯一の親友であったMちゃんに、自分には障害があり、周りからいやがらせを受けているということを打ち合けると、Mちゃんは「その目も宮瑚ちゃんの大切な個性だよ。」と、言ってくれたのだ。いつもならそんな私を仲間はずれにしてきたり、無視をしたりするはずが、Mちゃんだけはこんな私を受け入れてくれたのだ。その日からまた私は自信を取り戻していき、いやがらせも次第になくなっていったのだった。ただ、私の心に深く大きな穴が空いてしまった様に、今でも感じている。

このように人の人権を奪ってしまうことはとても簡単なことだ。だがしかし、人権を奪われてしまった人の心には深く大きな穴が空いてしまう。しかも穴の無かったきれいな状態には二度と戻らないのだ。つまり、人権を奪われてしまった人は一生、苦しい思い出と共に生きなければならないということだ。だからいじめをしたり、人の人権を奪ってはならないのだ。さらに、いじめはどんな時や理由でも起こってしまう。名前が変だから、自分よりも相手の方が優れた能力を持っているから、障害があるからなど本当に様々だが、決してどんな理由が相手にあったとしても、人をいじめたり、人の人権を奪ってはいけないということをより多くの人の心に刻み込んでほしい。

世界には今、約八十億人もの人がいて、皆がそれぞれ違う個性や特徴を持っている。頭の良い人、運動が得意な人、絵を描くのが上手な人や障害をもっている人も世界には多くいる。そんな沢山の人達が誰でも自分自身を愛せる様にするためにはひとり一人が、相手を認める心を持つ必要がある。相手を否定するのではなく、相手を認めることができる様な広い心を一人でも多くの人が持つことで社会は今より明るく、誰もが心地よく過ごせる場所に、必ずなる。皆が自信を持てる様な社会に、誰でも自分自身を愛せる様な社会になること。こ

れが私の夢だ。

最優秀賞（横浜FC・ニッパツ横浜FCシーガルズ賞）

6組「さん」と呼ばれて

横浜市立岩井原中学校　一年
小山優輝（こやまゆうき）

小学校の時、私が在籍していた支援級は「4・5組さん」と呼ばれていました。私が4年生の時「4・5組」から「チャレンジクラス」にクラス名が変更になりました。その時も先生や他のクラスの児童からは「チャレンジさん」と呼ばれていました。中学校に入学して6組に在籍するようになり、今度は「6組さん」と呼ばれるようになりました。

ではなぜ6組だけが「さん」付けで呼ばれるのでしょうか。他のクラスは「さん」付けで呼ばれていることはほとんど聞かないので、6組にも「さん」は必要ないと思うのですが、6組だけ特別扱いなのはなぜなのでしょうか。そもそも、6組と他のクラスの違いはどこにあるのでしょうか。

各学年の1組から3組は「一般級」と呼ばれるクラスなのに対し、6組は1年生から3年生が一諸に在籍する「支援級」と呼ばれるクラスです。また、6組の生徒は自分の学年で活動する時に「交流級」というものが割り振られていて、そのクラスで授業や行事に参加することになります。

一般級は、本人の希望の有無に関わらず、入学したら誰もが在籍するクラスで、ほとんどの生徒がこちらに割り振られます。それに対して支援級は、生徒本人が在籍を希望して、学校や市の教育委員会の判断によって

決定するクラスです。以前、私は友達に「優輝はなんで6組にいるの？」と聞かれたことがありました。その時私は「支援が必要だからに決まっているじゃないか」と答えましたが、相手はピンと来ていない様子でした。

私がこの質問をされたのはこれが初めてではなく、小学校の頃から度々聞かれてきました。ではなぜこのような質問をされるのか。そもそも周囲が抱いている「支援級のイメージ」とはどのようなものなのだろうか。と考えるきっかけになりました。

まず6組とは、学校生活において特別な支援や配慮が必要であると判断された生徒が在籍しているクラスです。個々が抱える困りごととは様々で、私のように一見、何の問題もなく学校生活を送っているように見える生徒もいますが、それは周囲の支えがあってこその学校生活なのです。

もしかしたらみんなの気持ちの中に、6組の生徒は普通の生徒とは違とういう間違った先入観があって、それを差別してはいけないという意識が行き過ぎてしまった結果、それ自体が差別意識となってしまい、結果的に6組を「さん」付けで呼ぶという形で表れてしまっているのではないかと考えました。

しかし、本当に大事なのは6組を「さん」付けで呼ぶことではなく、必要な生徒に必要な支援が行われ、みんなが同じように笑顔で過ごせる学校であることだと思います。

私は6組に在籍する一人の生徒として、これをきっかけに先生や他のクラスのみんなにも、この問題について少しでも考えてもらえたら嬉しいです。

最優秀賞（横浜ビー・コルセアーズ賞）

後悔の無いよう、思いを伝えて

横浜市立緑が丘中学校　三年
酒井愛奈（さかいあいな）

ある日、母が母国であるミャンマーから帰ってきた。そして、父が押していた車いすには、やせ細った祖父が座っていた。当時、ミャンマーでは軍事政府による政治が行われており、母の弟が逮捕された。そのため、年をとって体が悪い祖父を、母が世話をするために家に連れてきた。ただ、祖父は認知症で、孫である私と兄が分からず、父を息子だと思っていた。勝手に行動するため目が離せないのだが、母は仕事で忙しく、私たちで世話をすることになった。しかし、家族で母以外にミャンマー語を話せる人がいない。当然、意思疎通もできず、ほとんど母に任せてばかりだった。加えて、当時の自分には心の余裕が無かったため、一人の時間を邪魔されるのが嫌で、祖父と距離をとっていた。家族なのに、同じ家に住んでいるのに、私は祖父のことを疎ましく思っていた。

数週間後、祖父が予定よりも早く帰ることになった。私はその時、心の中で喜んでいた。一応母になんで早くなったのか聞くと、祖父が朝起きると、毎日「家に帰りたい。」と言うからだった。私に避けられていたことも、わかっていたようだ。そのことを聞いて、私は悲しいと同時に、悔しくなった。忘れられていたとしても、優しく接していれば、祖父も私も辛くならなかったのかもしれないのに。祖父を疎ましく思い、避けてい

た自分が憎く思えてきた。その日も夕食で、祖父に何か伝えたかった。でも、伝えられないまま、祖父は先に寝てしまった。

そのまま、祖父が帰る前日まで、時間が経った。夕食時、思い切って口を開いてみた。「来てくれてありがとう。」と伝えた。最初、日本語が分からない祖父はぽかんとしていたが、母がミャンマー語に訳して伝えてくれた。母の言葉を聞いた祖父は、その後優しく笑って、私に何か言った。私はよく分からなかったが、隣でその言葉を聞いた母は、泣いていた。いつも気丈な振る舞いをしていた母が泣いているのを、その時、私は初めて見た。そして母は泣きじゃくりながら、「おじいちゃんも家族に会えてよかった。」と、祖父の言葉を日本語で私に教えてくれた。その言葉を聞いた私も、泣いてしまった。母が根気強く教えてくれたお陰で、私たちが孫だと、すでに思い出していたらしい。

初めてしっかりと向き合ってみたことで、言葉を直接伝えられなくても、気持ちを伝えることはできた。ただ、もう少し早く伝えられていればよかったとも思った。

今も祖父は体が悪いらしく、テレビ通話するときも、いつも寝ている状態のままだ。いつ最期の時が来てもおかしくないからこそ、一つ一つの会話に、思いを込める。後悔が残らないように。

最優秀賞（横浜キヤノンイーグルス賞）

地球上のみんなで

横浜市立神奈川中学校　二年
伊藤恵美

五年前の春、日中ハーフの私は父の都合で、上海から日本へと急遽帰ることになった。私の出身地は中国の上海であり、生まれてからずっと上海に住んでいた。いつか日本に帰る予定はあったが、それは本来小学校を卒業してからの話だった。上海に八年間も住んでいて、無論中国語はペラペラだし、上海の方言も大体通じる。自分が生まれ育った街、大好きな友達を見て、当時の自分は泣きそうになった。この親友とのお別れで生じた悲しい気持ちと、全てが一気に変わる期待と緊張を抱いて、私は日本に帰った。

手続きが全て完了した頃には、もう既にクラス替えが終わっていた。転校生としての初日は言語の壁にブッ倒され、最初から最後までわけのわからないままで家に帰った。担任の先生はとても親切で、物凄くありがたいことだった。大体のクラスメートは先生と同じように、優しく接してくれた。しかし私は言葉が通じないからという理由で、班活動に参加させてもらえない時期もあった。「コロナウイルス」と親友からふざけ半分で言われ、私の心が傷ついたこともあった。一年かけて日本語を本気で勉強し、四年生の前期には、意味の通じる日本語を話せるようになった。国際教室のおかげで、文章も少しずつ書けるようになったので、自分に自信が戻ってきた。優しく接してくれる人もいれば、そうじゃない人もいた。日本語を話せるか疑われ、様々な理

由で断られる班の役割。中国への偏見を口にし、からかってくる一部のクラスメート。今でも心に引っかかっているのは、ある日の班活動でのこと。「ここのところ、どう思う。」と私は同じ班の人に聞いた。話し合いで他の人の意見も欲しかった思いに加えて、次回の発表のためになると思ったからである。しかしその返答は、冷たい目で見られて「そんなの自分で考えて。こんなのもわからないの。」だった。それは偏見でも、差別でもないのかもしれない、ただ自分に文句があったのかもしれない。日本に来てから初めて「距離感を保つこと」について体感した瞬間だった。怒りと悲しみが混ざった気持ち、胸が締め付けられたように苦しい。家に帰っても、布団の中でも、何故、こんなことを言われたのか、どうしてもわからなかった。その日、私は寝れなかった。ずっと泣いていた。

私の国籍は日本だが、今までの生活環境はずっと上海だった。文化の違いには中々慣れない。以前もこのような事はあった。国によって今までの普通が迷惑に変わる。社会の中華人民共和国分野について学ぶと、いつも「中国人はマナーが悪い。」「意地悪な人多いよね。私、中国人嫌い。」のような偏見が飛び交う。日本国籍の自分と関係なくはない。上海にいる友達のことを思い出すと聞いていて気持ち良い言葉ではない。言語の壁の向こうには、さらにもっと大きな壁があった。

インターネットの普及で、簡単に情報を得られるようになった反面、一部の情報だけをとり入れ、大局観を欠く判断になってしまうことが増えた。今の社会において、偏見は、気がつかないところにもあふれている。自分にできることはただ一つ、判断を下す前に、物事の全体を自分の目で確かめる。複数の情報を繋ぎ合わせ、より真実に近づく。

小学校六年生の前期、先生のおかげと自分の努力で、スピーチコンテストに学校代表として出場した。平和

をお題に、みんなそれぞれの意見があったが、ただ一つ共通点があった。みんな平和を目指してスピーチを頑張っていることだ。どの国にも優しい心を持った人がいる。だからこそ、地球上のみんなで差別や偏見のない世界を目指していきたい。

最優秀賞（横浜ＤｅＮＡベイスターズ賞）

バリアをなくすために

横浜市立早渕中学校　三年
竹内花歩（たけうちかほ）

みなさんは「バリアフリー」という言葉を聞いてどのようなことを思い浮かべますか。私は最初、点字ブロックや多目的トイレなどの障がいのある人々が過ごしやすくするための「もの」を思い浮かべました。しかし、バリアフリーとは障がいのある人や高齢者などが社会の中で安全・快適に暮らせるように身体的、精神的、社会的な障壁（バリア）を取り除こうという考えであり、私が思い浮かべたことは、バリアフリーのうちの一部でしかありませんでした。また、私は普段生活していてバリアフリーはだいぶ充実していると考えていました。しかし、私はこの春ある体験をしたことによってその考えは一瞬にしてひっくりかえることになりました。

体育祭を二日後にひかえた日の朝練での出来事でした。私は最後の大会がひかえていたこともあり、いつも以上に全力で取り組んでいました。そして練習の最後、疲れがでてきていたこともあり、思いっきり足をひねってしまい、靱帯を損傷してしまいました。この怪我で、人生初の車いすと松葉杖生活を体験しました。この生活が自分が思っていた数十倍大変でした。どこに行くにも普段の倍以上かかってしまったり、道が狭くて通れない、階段があるという場合は遠回りをしなくてはならなかったりしました。他にも普段は何とも感じな

い少しの段差やレールが不便の感じたり、雨の日はいつも以上にすべってしまったりしました。これらの体験から私が思っていたよりも全然バリアフリー化は進んでおらず不十分であると感じました。よく考えてみると段差は大きいものから小さいものまでいたるところにあるし、点字ブロックや点字の表記があるところはまだまだ限られているなど、実際に体験しなくてもよく観察すれば気づくことがたくさんあることが分かりました。また、普段から仲の良い人から、普段はあまり関わることがない人までたくさんの人に助けてもらい、この大変な生活を乗り越えることができました。ですが、ありがたいことにみんないろいろなことを手伝ってくれたので「これは自分でもできるのにな」と思うことが多々ありました。ただでさえできることが限られている中でさらにできることを失っていく気持ちでした。またその気持ちを感じると同時に私も同じようなことをしていたかもしれないと思いました。

この怪我で、中学校生活最後の体育祭に参加することができなかったり、最後の大会にほぼ練習できなかった状態で出て納得のいくプレーができなかったりとたくさん悔しい思いをしました。しかしそれと同じくらいたくさんの大切なことを学びました。この体験を通してバリアフリーの重要性をさらに実感しもっとバリアフリー化が進むように自分ができることを探し実践していきたいと思いました。また、バリアフリー化を進めていくうえで大切なことは、障がいのある人や助けが必要な人に快く手を貸せる人が増えることだと感じました。その際には、相手が必要としている以上の手助けは迷惑になってしまう可能性があることを世界中の人々が認識することも大切です。この世の中がバリアのない自由な世界になる日が一日でもはやくくるよう、自分にできることを探し一生懸命行いたいと思います。

優秀賞

きょうだい児が思うこと

横浜市立希望が丘中学校　三年
井川（いがわ）　姫衣奈（きいな）

みなさんはきょうだい児という言葉を知っているだろうか。きょうだい児とは障がい者の兄弟、姉妹のことをいう。障がい者の中には知的障がい、先天的後天的な身体障がい、聴覚、視覚障がい等が含まれる。私の兄も知的障がい者のため私はきょうだい児だ。

きょうだい児とは「障がい者がいるため周りの目が気になって友達を家に呼べない」「障がい者が奇声をあげることもあるため家族旅行に行けない」そのため「寂しい思いや我慢をすることがある」と本などでは書かれている。でもそれはきょうだい児によってそれぞれだ。その例として私の兄の特性も、きょうだい児である私も本に書かれているような事はほとんど当てはまらない。障がいについてよく知らない人は本などに書かれている情報だけで先入観を持って障がい者と関わっているのではないかと私は思う。障がい者についてよく知らない人は「こわい」「どう関われば いいの」など負のイメージを持っている人が多いのではないだろうか。きょうだい児もそんな周囲の目があり、きょうだいが障がい者である事を隠したりその存在が嫌になったりするのかもしれない。現在、「きょうだい児」が全国にどれくらいいるのか把握できていないそうだ。私は「きょうだい児」の存在に目を向けられていないためこのような結果になってしまったと思う。きょうだい児の家庭

では物心ついた時から「あたり前」と思ってきた生活が他の家庭では違うという事もあると思う。私も低学年の頃は疑問に感じたこともある。でもその都度家族から兄の状況を教えられ、兄の頑張りを知った。そして学校の友達が差別なく兄と関わっている姿を見て兄を誇りに思ったし、友達にも兄の存在を隠すことなく過ごすことができた。私の通っていた小学校は個別支援級との交流が多かったため、みんな「障がい者」と理解する前に「一人の人間」として関わってきたからではないかと思う。そのため「障がい者」「きょうだい児」という先入観がなく友達になっているため「おもしろい」「やさしい」という純粋な気持ちで関わっている。だから兄に対しても私に対しても差別なく接してくれたのだと思う。そして学区内の学校のため地域の方々が優しく見守ってくれている日もあった。私のようにきょうだい児でも幼い頃から周囲の友達や地域の人の差別ない関わりや理解があるときょうだい児の悩みは少しでも軽減されるのではないかと私は考えている。今、横浜市には全ての小中学校に個別支援級を作り私の通った小学校のように個別支援級との交流をたくさん図り障がい者に対する偏見を持たずに成長してほしい。そしてそんな子供達を見て大人達も「障がい者」「きょうだい児」の理解をしてほしい。今回ここでは私と同年代のきょうだい児の置かれている環境・思いを書いてきたが先日こんなニュースを見た。四十代の女性が知的障がい者の五十代の姉の世話をしているというものだ。父は亡くなり母は入院しているそうで、その四十代の女性は結婚もせず姉の世話だけの人生を送ってきたらしい。この女性の「私は自分の人生を送りたかった」という言葉を聞いて私は悲しくなった。こんな気持ちで毎日を過ごすきょうだい児が少しでも減るようにきょうだい児にも目を向け、そして安心して過ごせるようもっといろいろな支援があるとよいと思う。

今の私には兄のことで悩みは特にないけれどニュースなどを見ていると、これからきっと自分だけではどう

にもできないことや悩みができるかもしれないことを知った。障がい者だけでなく、きょうだい児も自分の人生を自由に歩んでいけることを私は願っている。

優秀賞

人を想うこと

横浜市立戸塚中学校　二年

匿名

人を想う、とはどのようなことなのだろうか。他人の気持ちに配慮をすること等、様々なことがあげられると思う。私は、人を想うことの一つに、人の良さを見つけることがあると考える。

だが、人の良さを見つけ、ほめることが、時に人を傷付けてしまうことがある、ということを私は自分の過去から感じている。

「ハーフってうらやましい」日本人とアメリカ人の両親をもつ私は、そんな言葉をかけられることがある。そのたびに私はなぜ、と思ってしまう。自分の血筋に対してほこりはもっているけれど、うらやましい、と思うようなことではないと思うからだ。この言葉を言われる場面が二つある。

まず一つ目が、外見についてだ。私は、自分ではあまり髪や目などにハーフだと分かるような特徴は無いと思っている。しかし、周りの人には目鼻立ちが日本人とは違う、といった内容の言葉をかけられることがある。それに対して嫌な気はしない。だけど、ときどき考えてしまうのだ。日本で外国人みたいだと言われる。そしてきっとこれはアメリカに行っても同じことが起こる。このことに、私は何ともいえない気持ちになる。

「普通が良いのに。」

と思ってしまうのだ。そして、これは私だけが思っていることではなかった。

同じハーフの友達に、金髪の子がいた。その子は周りと違う髪色にとても苦労しているようだった。その子がこう言ったのだ。

「普通が良かった。」

私はその言葉を鮮明に覚えている。その子の髪は本当に綺麗で、私がほめたときにその子はそう言ったのだった。私は今でも後悔している。私が感じているこの気持ちを、その子も感じていたのだった。私はその子の髪を、「ハーフで金髪だから」ほめたわけではなかった。だけど、そう受け取ってしまったということは、そうならざるを得ないような事を経験してきたのかもしれない。黒色や茶色の髪が多い日本では、彼女の様な金髪はよく目立つ。それは時に、誰かの妬みをかってしまうほどに、言わば「悪目立ち」してしまう。久しぶりにその子に会った時、その子は茶髪になっていた。私が理由を聞くと「目立ちたくないから」と言っていた。それを聞いて私は胸が痛んだ。あんなに綺麗だった金髪を変えてしまうことは防げたのだろうか。心がすり減っている時、自分自身を認めることは本当に難しい事だ。だからこそ、私に何かもっとできた事があったのでは、と色々考えてしまった。

私はこれらの経験から、人を想うことって難しいな、と思った。誰かをうらやむ気持ちですら人を傷つけている。

次に二つ目は、英語についてだ。私は幼い頃から英語にふれる機会が多かったおかげで、英語の発音能力が少し周りより高い。そしてそこをほめてもらうことも多い。「流石ハーフ」と。私はやはりそこに違和感を覚える。発音が良いのは、私が小さい頃から努力してきた結果であり、生まれつきでは断じてない。実際、私は

小さいときに発音のコツなどを親に聞き、何度も繰り返して練習した。だからほめてもらえるのはとても嬉しいけれど、ハーフだから、というのが理由にならないことを、分かってほしいと思うのだ。別に、これは私だけに関わる話ではない。大抵の人は努力をして結果をつかむ。だが、努力して得た結果を、足掻いてきたから得た結果を、さも当然の様に「生まれつき」とされるのは、どうだろうか。

私はこれらの自分の経験と向き合う中で、人を想うことの難しさを知った。なぜなら、人の悩みなどその人にしか分からないからだ。私の悩みや冒頭で語ったあの子の悩みはどちらもハーフであることが関係している。でも本当はそんなことで悩みたくないはずだ。見た目ではなく、中見を見てほしいのだ。私自身、過去の経験から人をほめるときはなるべく中見をほめるようにしている。誰もが「私は私でいいんだ」と思えるには、一人ひとりが人を想うことが大切だと思う。この人を想うことは、初めに述べた人の良さを見つけることだけではない。人を理解してみる。その人の立場に立ってみる。人のことを考えてみる。これらも、人を想うことになるのではないだろうか。人を受け入れるのは難しい。合わない人もいる。だけど、その人を理解するのは実はそんなに苦ではない。ただただ、事実として理解して、受け止める。これもある種の人を想うことだと思う。そうすれば、だんだん世界に笑顔は広がっていくのではないだろうか。だから、まずは自分から踏み出さなければ。私はこれからもっと人を想うことのできる人になりたい。いや、なっていくのだ。

優秀賞

自分らしさを信じて

横浜国立大学教育学部附属横浜中学校　三年
岡倉心咲

私は、「女の子らしい」という言葉に抵抗がある。それは、小さい頃から感じていて、多様性が求められている今、敏感に反応し始めた訳では無い。でも、コスメ集めやオシャレが好きだし、美容にも気を遣う。ファッション雑誌も毎月欠かさずに読む。「私、女の子しているな。」とも思う。でも、どうしても「女の子らしい」と言われることが心のどこかに引っかかって気にしてしまうのだ。

私は、「女の子らしい」という言葉で自分の個性をまとめられてしまうのが嫌なのだと思う。一度、頭の中で「女の子」のイメージをしてみてほしい。恐らく、可愛い物が好き、小さい物が好き、落ち着いている、おしとやか、というイメージを持つ人が多いと思う。だからといって、そのイメージが、全ての女の子に共通することだと思っている人は少ないと思う。しかし、私に「女の子らしい」という言葉をかけるということは、「女の子」のイメージを私に向けている、と心のどこかで解釈してしまうのだ。

「女の子らしい」という言葉を親にかけられた時には、親が理想としている「女の子」を押し付けられていると感じてしまう。もしかすると、「親の女の子に対する想像」の方がしっくりするかもしれない。

小学校低学年の時、ピアノの発表会でドレスの様な服装になったことがある。当時の私は、フリフリのワン

ピースよりも、ズボンを好んでいた。その為か、父に「今日の服装、女の子らしくていいね。」と言われたのだ。父が褒めてくれていることは、当時の私でも分かっていた。けれど、普段の服装をあまり褒められていなかった私は、「お父さんはこういう服を着てほしいのかな。」と寂しい気持ちになってしまった。

他にも、母に「女の子なのだから、言葉遣いに気をつけなさい。」と言われたことがある。母がそう言ったのは、きっと女の子はおしとやか、というイメージがあるからだと思う。けれど、女の子でなかったのなら気を付ける必要が無いのだろうか。そうではないと思う。言葉遣いは、性別関係なく気を付けるべきである。だから、「その言葉は、人を不快に思わせてしまうから、控えた方がいいよ。」と言ってほしかった。自分の心が狭いだけかもしれないし、わがままなのかもしれないけれど、「女の子だから」という理由で叱ってほしくなかった。もし女の子という理由で叱るのならば、それは個性として認めてほしい。それは女の子だけでなく、男の子にも共通することだと思う。女の子だからこうとか、男の子だからこうというのは、言う人の理想や想像、イメージを押し付けているようにしか思えない。もちろん、個性が誰かを傷つけてしまうものなのなら、注意や指摘が大切だと思う。いけないことだと学ぶきっかけになるからだ。けれど、そうでないのなら、性別を理由に個性を否定してほしくない。

最近、「多様性」という言葉をよく耳にする時代になった。その多様性を認めるには何が必要なのだろうか。それは、理想やイメージを、相手に押し付けないことだと思う。どうしても、漫画やアニメ、絵本や教科書など、日常生活でイメージや偏見を自然と持ってしまう。だから、持つこと自体は誰にでもあると思う。けれど、そのイメージや偏見とのギャップを、変えるべきだと強要するのではなく、その人の「個性」として認め合うことが必要だと思うのだ。

また、周りから言われたことを深く受け止めすぎず、自分のことを、自分が認めてあげることも必要だと思う。今まで、「女の子らしい」という言葉に抵抗があることを、自分の変わっている所で、喜べるように変わらなければいけないと思っていた。でも、「多様性」という、様々な考えを認め合う、尊重し合う、という言葉に出会ってから、女の子らしいと言われて素直に喜べる人と、素直に喜べない人の両方がいて良いのではと、今は思えるのだ。誰かの理想や想像に合わせる必要はない。私は、たまたま喜べない人だっただけで、無理やり喜べる人にならなくてもいい。それを個性だと認めたい。

個性が無ければ、違う価値観を知る面白さや、楽しさなどの刺激が無くなってしまう。だから、自分の変わっていると思っている所も個性だと認めて、一人一人が誇りに思ってほしい。そして、お互いに認め合ってほしい。そうすれば、一人一人が自分らしく生きていけると思う。

優秀賞

二人のためにできること

横浜市立東山田中学校　三年
小野（おの）　ももこ

私には百歳の曽祖父と九十八歳の曽祖母がいる。二人で住んでいるので、私が小さい頃はよく二人の家に遊びに行った。いつも優しくて一緒に遊んでくれる二人が、私は大好きだった。そして、二人はいつでも元気いっぱいなので、よく聞く「認知症」という言葉とはこの先も無縁だと勝手に思っていた。

中学生になってから、部活と勉強が忙しくなってなかなか会いに行けなくなった。そして、ある時久しぶりに顔を合わせた時に、曽祖母の物忘れが激しくなっていたので病院に行くことになった。後日母から、曽祖母はアルツハイマー病であったということを聞いた。正直その時私は、そのことをあまり重大視していなかった。今までの、昔習った歌をたくさん教えてくれる明るい曽祖母の姿と、本やニュースでよく見る「認知症の高齢者」の姿を全く結びつけることができなかったからだ。しかし、曽祖母の容態は急速に悪化した。曽祖父のことが分からなくなって、毎晩、

「知らない人がうちにいる。おじいさんがまだ帰ってこない。」

という電話がかかってきたり、夜中に家を抜け出して警察の人にお世話になったりしたこともあった。ずっと一人で看病している曽祖父も気を病みはじめてしまっていて、前に母と二人で曽祖父母の家を訪ねた時に、

「もう死にたい。はやく自殺したい。」

という曽祖父の言葉を聞いた時は思わず涙が溢れた。この日をきっかけに私はこの現状をどうしたら、みんなが幸せになれるにか、よく考えるようになった。結論から言うと、まだ私の中で納得のいく方法は見つかっていない。曽祖父は介護の疲れでイライラを曽祖母にぶつけてしまう。それによって曽祖母はさらに認知症が進んでしまう。それでも、ずっと続けてきた生活を急に変えるのは難しいし、結局は二人で一緒に暮らしたいようだった。そこで、私が二人のためにできることを考えてみることにした。私が考えた「私にできること」は主に二つだ。

一つ目は認知症の曽祖母の言う事を否定しないことだ。曽祖母は同じ話を何回もするし、私のことを分からなくなる時もある。そんなときに、他の人に任せるのではなく、私が寄りそって話を聞いてあげられるようになりたい。

二つ目は曽祖父の疲れが溜まってしまわぬように話を聞くことだ。ずっと一緒に暮らしてきた人に存在を忘れられてしまうというのは、きっと想像できない辛くて悲しいことだと思う。その辛さを私が代わりに味わうことはできないが、私にも相談に乗ることはできるから、少しでも曽祖父のストレスを癒やせたらいいなと思う。

このように、直接は力になれなくても、ささいなことで二人を支えることにつながると思う。そして、それを人任せにするのではなく、私が実行できるようにしたい。これからも大好きな二人の笑顔を守るために、私にできることを考えていきたいと思う。

優秀賞

全員が障がい者

横浜市立秋葉中学校　三年
佐藤芽依

私は片目が弱視です。この目が見えるようになることは、きっとありません。しかし、私はこの目が嫌いではありません。この目が生活を妨げることもなければ、困ることもないからです。しかし、もし私の目が両目とも弱視だったら、「障がい者」と呼ばれ、時には偏見に心を悩ませていたことでしょう。

私はこの「障がい者」という言葉が好きではありません。そう思ったきっかけは、やはり私の弱視にあります。私の場合、先天性白内障という病気で、原因は不明です。最初のうちは両親も心配していたそうですが、今では、私も両親も片目が見えないことを全く気にしていません。しかし、私はこれまでに「片目が見えない」と伝えることで周囲の人から変に気を使われてしまったり、友人からそのことをからかわれてしまったりした経験があります。

今、一般的に「障がい者」と呼ばれている方々には、目が不自由、音が聞こえづらい、身体を思うように動かすことができないなどの身体に関する不自由を抱えている方、発達障がいや知的障がいなどの社会生活を送る上での不自由を抱えている方が多いと思います。私は「障がい者」と呼ばれている方々は、「自分の弱点や苦手なことが表に出やすい」ということではないかと思います。そうなると、今生きている全員が「隠れ障が

い者」なのではないでしょうか。苦手なことは誰しもありますが、その苦手なことが表に出やすい人とそうでない人がいると思います。自分が生きていく上で苦手なことを「障がい」と呼ばれ、少し苦手なことが表に出やすいだけで、偏見をもたれたり、誹謗中傷されたりしやすいというのは違うと思うのです。

私は小学生の頃から、個別支援級にいる子とグループを組んだり、おしゃべりしたりすることがよくありました。その度に先生方からは「偉いね」や「ありがとう」と声をかけられ、友達からは時に笑われたり、からかわれたりもしました。しかし、私にはこれが不思議でなりません。なぜ、自分が仲良くしたい子と一緒にいるだけなのに、そんな扱いを受けるのでしょうか。仲の良い子がたまたま個別支援級に在籍しているだけなのに、どうして私は「いい子」であり「変わった子」でなければいけないのでしょうか。これは、個別支援級に在籍しているというだけで、無意識のうちに「私たちとは違う」という差別の気持ちをもち、自分の方が優位な立場にあると勝手に決めつけているのではないかと思います。「普通」と呼ばれる人が呼び名だけで判断して「障がい者」と呼ばれる人の優位に立とうとすることは本当に良くないことだと思います。

最初にも書いた通り、人間はみんな苦手なことがあります。だから、それが表に出やすい人を「障がい者」と呼んであざ笑うより自分の苦手なことも相手の苦手なことも正しく理解し、お互いに助け合う方が人生はよっぽど楽しくなるし、有意義になるのではないかと私は思います。「みんな違って、みんな良い」という言葉をよく耳にしますが、この「みんな」の範囲を広げてみたら、また違った景色が見られるのではないでしょうか。

優秀賞

イメージを大切にして

横浜市立秋葉中学校　三年
信夫（しのぶ）　心（こころ）

テレビを見ていると時折流れてくるＣＭがある。私はそのＣＭが苦手だ。漫画のようなコマ割りとセリフの映像のあと、最後に男女どちらの声が聞こえたかと問いかけられ、「無意識の偏見に気づくことからはじめましょう」というメッセージでＣＭは終わる。私が場面を見て想像した声は、偏見なのだろうか。ＣＭに遭遇するたびにもやもやとした気持ちが大きくなっていった。

私の家では家事のほとんどを母が担っている。父は夜遅くまで仕事で帰ってこない。だから、私の中のイメージでは家事をするのは〝母親〟であり、育児の場面では女性の声が聞こえる。会社で働くのは〝父親〟であるという我が家では、仕事のシーンでは男性の声を思い浮かべた。ふり返ってみると、このイメージは幼い頃から変わっていないように思う。しかし成長してくると、私のイメージが全てではないこともわかってくる。世界には何十億人の人がいて、多くの家族がいる。家族のあり方は家族の分だけあり、その家族の分だけ〝家族のイメージ〟があることもわかってきた。その上で、私があのＣＭを見て想像した「声」は無意識の偏見になってしまうのだろうか。私自身の考えが否定されたように感じたのが、胸のもやもやした気持ちの原因だと思う。そんなつもりはないのに、偏見をもっていると決めつけられたようで苦しくなってしまったのだ。

しかし、このＣＭに反論したくて考えているうちに、自分のもつイメージを私自身がとても大切にしていることに気付いた。過去の経験や思い出から場面を想像するとき、その頭の中のイメージは私自身だと言ってもいい。つまり、全ての人にそれぞれのイメージがあるということだ。さまざまな考えやイメージや意味や答えが、人によってあっていい。そして、私が私のイメージを大切にするのと同じように、全ての人が自分の中で思い浮かべる場面や声を大切に守りたいと考えていると思う。お互いがお互いの考えを認め合うことができたら、それがいちばん、多様性に富んだ世界だと思う。

あのＣＭは、「こうでなくてはいけない」とか「こうあるべきだ」という押しつけを、私たちが相手にしてしまいがちだと気付かせてくれた。自分の意見を押しつけて相手を黙らせるのはよくないし、自分が否定されたら苦しくなるのと同じように、相手を自分の価値観や尺度で決めつけてしまったら、相手も自分も息ができなくなってしまう。どんな声が聞こえてきてもいい。どんな場面を想像しても、イメージを思い浮かべてもいい。自分を大切にすることと、相手を尊重して守ることは同じだと気付くことができた。私はもう、あのＣＭに遭遇してもただ悲しくなったりはしない。

幼い頃の体験、育った環境という小さな社会から、成長していく過程の大きな社会、世界に出ていく中で、たくさんのイメージに触れる経験が、自分の中の多様性を育んでくれると思う。新しい気づきに出会ったときには、いつでもイメージを更新していきたい。どんな場面でどんな声が聞こえたか、相手と語り合える喜びをもって。

優秀賞

平等な世の中で好きなものにふれる

横浜市立平楽中学校　二年
田中来実（たなかくるみ）

人には、それぞれ好きなものがあると思います。例えば音楽、スポーツ、読書…。音楽が好きなら、コンサートに行きたかったり、スポーツだったら試合観戦、読書であれば図書館に行きたかったりすると思います。

こういった「〇〇が好きだから見に行きたい、感じたい」という思いはだれもがもち得るものです。

私は歴史を学ぶことが好きで、お城など関わりのある建築物もときどき見に行くことがあります。ある日、お城について調べていると、一つのニュースが目に入りました。

「名古屋城のエレベーターを撤去するか？しないか？」

というテーマで、私は興味を持って読み進めました。そこには、こういったことが記されていました。

「一六一五年、名古屋城は、江戸幕府初代将軍の徳川家康によって築かれた。だが、太平洋戦争により焼失してしまったため、一九五九年、鉄骨鉄筋コンクリート造で再建された。そんな名古屋城は最近、はじめに築かれたときのような木造での復元が計画されている。名古屋城には、全国でも珍しく、戦前の写真や実測図など、復元に役立つ第一級の資料が数多く残されており、当時に近い忠実な復元が可能である。しかし、木造で

の復元に伴って、鉄骨鉄筋コンクリート造で再建したときに設置されたエレベーターを撤去せざるを得なくなる。」

エレベーターは、特に、高齢者や障がいがある人が安全に移動するためのものです。エレベーターによくある鏡も、車いすを使う人が降りる際に後ろを確認できるようにつけられているというほど、エレベーターは体に不自由な人たちにとって便利です。

そんな、バリアフリーに貢献するエレベーター。これを撤去するとなると、お城がどんなに素晴らしく忠実に復元されても、それを見られなくなる人がたくさん出てくることになります。ここでエレベーターの撤去をめぐる問題が取り上げられているのです。

この問題を「文化財保護」を重視してみると、エレベーターを撤去しても復元できた方がいいかもしれません。築城当時の名古屋城によく近づけるための豊富な資料と最先端の技術が揃う今、木造で復元しないのは勿体ないようにも思えます。また、復元度が高ければ、それを見た人もとても満足できるのではないかとも考えられます。

ですが、「バリアフリー」重視でみると、エレベーターはなくてはなりません。高齢者や障がいがある人など、行動に困難を感じる人たちは、階段なども大きな「バリア」になりかねません。やはりお城で唯一の上り降りの手段といえるエレベーターが撤去されてしまったら、その人たちはどんなにお城をアップデートしたとしても、その姿を実際に見ることができず、残念な思いをすると思います。それは、その人たちやその人たちと共に過ごす人々にとってどんなに悲しいことなのでしょう。

私は、歴史やお城が好きだからこそ、たくさんの人とそのおもしろさを分かちあいたいと考えます。だれか

「私はエレベーターがなくては移動できないから、お城は行かなくていい。」
というように見たくてもそれがかなわない人たちがいたら、人権のあり方の平等さを感じられないし残念だと思います。
私はエレベーターを撤去しないでほしいです。一部のだれかが見られないのではなく、みんなが楽しめる文化財というのがとても理想的だと考えます。
はじめに述べたように、人が「これが好きだからこれを見に行きたい、感じたい」と思うのは当然のことだと思います。名古屋城の問題に限らず、だれもが好きなものに思うままにふれられる機会をもてるような、平等な世の中になってほしいと強く思います。

優秀賞

一つで一人を決めないで

横浜市立荏田南中学校　三年
三宅結子（みやけゆうこ）

青い空と美しい鳥居に、笑顔の班員たち。外国の方にそんな写真を撮ってもらっていた時、私の心は罪悪感で埋めつくされていた。その理由は、数十分前の会話にある。

私たちは修学旅行で京都を訪れていた。この日の予定は班別自主行動だったので、班の六人だけで行動することとなる。その中で、班員全員が写った写真を撮ることが、与えられたミッションの一つだった。しかし広い京都で同じ修学旅行生に出会うことには期待できないし、平日の京都の名所は外国人観光客がほとんどだろう。外国の方に撮ってもらうしかないかな。そんな話になっていた時、ある子が「外国人にカメラを渡したら盗られてしまったって話、聞いたことあるよ」と言った。「確かに、よく聞くかもしれない」私を含めた何人かが同意し、「外国の方に写真を撮ってもらう時は気をつけよう」という結論に至った。

目的地に着くと、やはりそこにいたのは外国の方がほとんどだった。仕方がない、少し不安を感じながらも、私たちは勇気を出して外国の方のグループに声をかけた。するとその方々はSure!と快諾し、何パターンかの写真を撮って、その上笑顔でHave a nice day!と言ってくれた。

その笑顔を見て、私はハットした。大きな偏見を持っていたことに気づかされたのだ。「外国人にカメラを

盗られた」という一部分だけの情報を、外国の方の全てにあてはめて常識として捉え、偏った思い込みを向けてしまった。なぜあんなことを言ってしまったのだろう。申し訳なさと恥ずかしさ、そして大きな罪悪感で胸がいっぱいになった。

その時私は、もう同じ誤ちはしない、と心に決めた。

その後修学旅行から帰ってきて日常を見渡してみると、「○○だから、こうだろう」という無意識の思い込みは身近であることが分かった。お父さんがいないから、苦労している。障がいがあるから、かわいそう。男子だから、勇気がある。あの塾に通っているから、頭がいい。お姉さんはこんな人だから、妹もそう。前に悪口を言っていたから、今の行動も悪意が込められているに違いない。――このように、限られた情報や偏った思い込みで人を見てしまうことは、日常にあふれているのだと気付かされた。

そして私にも、一部の側面だけで「私」を作り上げられた経験がある。特に印象に残っているのは、夏に友達から言われた言葉だ。

「足が速いしダンスも上手だから、水泳もできると思ってた。泳げないなんて、意外だね。」今思い返せば、言った本人は全く悪気はなかったと思う。だが小学三年生だった私は、少し衝撃を受けた。何でもできる私でないといけないと言われているような気も、泳げない私を真っ向から否定されているような気もしたし、少しの情報で「私」を決めつけないでほしいと悲しくなった。何気ない一言だったが、この言葉は今でも時折私の心に顔を出す。

例え悪気はなかったとしても、一つの情報でその人のイメージを作り上げて決めつけることにより、嫌な気持ちをした人、そしてそれが心に強く心に残っている人は、私だけではないと思う。また私が外国の方々にし

てしまったように限られた情報を一般化して同じ特徴を持つ人全てにあてはめることにより、その人を遠ざけ、差別を生んでしまっているかもしれない。

私たちには、好きなことをして、たくさんの人との関わりの中で気持ちよく生きる権利がある。だから、周りの人のイメージに縛られたり、憶測で嫌われたり、差別されたりすることは絶対にあってはならない。そのためには、無意識な思い込みをしていないか周りを見渡すこと、そして、表面的な一部の情報にとらわれず、その人の内面に目を向けることが大切だと考える。

多様な人々が共に生きる今、一人ひとりがこの意識を持って過ごすことこそが、誰もが輝ける世界への第一歩だと思う。

優秀賞

当たり前のない世界へと思いを馳せる

横浜市立中川西中学校　三年
森岡千智

ある時、父に「この機械の充電は終わったかな?」ときかれた。その時、緑色が充電が終っているということを知らないのかと思い、緑だから終わっているよと教えてあげた。

しばらく時がたち、また充電をしている機械を見ながら父に同じことを聞かれ、この前教えたばかりなのに忘れちゃったのかなと思い、イライラとしながら「充電は終わっているよ」とぶっきらぼうに教えた。その時、父は自分にこう教えてくれた。「赤と緑の見分けがつきにくいのだ」と。どうしても分からないから聞いてくるのであって、忘れてしまっているのではなく、また知らないというわけでもないのだとわかると、自分の行動が少し恥ずかしくなった。

そういえば、「小さいころパイロットになりたかったけれども、赤と緑がはっきりわからないことがあって夢をあきらめた」と言っていたことを思い出し、夢さえあきらめざるを得ないことがあるのかと強い衝撃を受けた。

父が赤、緑の見分けがつきにくい色弱というハンデをおっていることがわかると、母がそれとなく父のことを支えていることが見えてきた。たとえば、父が母と一緒に夕飯の支度をしていると、お肉を焼く作業は父が

やっているものの、肉に火が通っているか色で確認する作業は母がやっていた。他にも、テレビの電源が切れているか、物を買うときの色確認や洋服の色の確認などだ。

ユニバーサルデザインという言葉があるが、父の状況からすると我が家の家電はダメダメだ。色弱の人は男性の5％、その中で赤緑の識別がしづらいという人が一番多いとのことだが、それだけの人が問題を抱えているにもかかわらず対応できていない。

ある時、母が仕事でウェブサイトを作っていると話してくれた。それは海外の社員向けのサイトらしく、いろんな文化を持ち合わせている人が読むことになるため誰が読んでも分かるように簡潔に書くこと、○×といったマークも文化によっては理解が異なるため気をつけなければならないこと、また社員の中には視覚障がい者も働いているため画像にはソフトが読み上げるように文字を埋め込んでいること、さらにツールで視認性を確認していることを話してくれた。赤緑の識別が苦手な人、ぼやけて見える人などがどのように見えるかを見せてくれた。なんとなく言葉では、そういう人がいるとは理解していたが、実際どのように見えるかを見たときは驚きだった。自分が見えている色は、他の人も同じように見えていると思っていたからだ。

母の仕事では、あらかじめハンデがある人や異文化のことも想定してデザインを決めている。私の当たり前が通じない人のことを知ったうえで設計に反映しているが、もしハンデのことや異文化の知識がなければ、我が家の家電とおなじことが起きてしまうだろう。

私は物事をわかったつもりになっていたけれども、この経験を通じて知っていないことに気づかされた。白杖を持った人は視覚障がい者だと認識されやすく、周りの人がサポートすることは可能である。しかし、視覚障がいには見える範囲、色など多種多様な見え方の違いがあり、さらに傍目からは障がいがあることすら気づ

かないこともある。

私も、母のようにハンデを負っている人や異文化の人を理解し、配慮できる人間になりたいと思った。そのために、まずは「知る」ことが大切だと思う。

まだまだ知らないことばかりであるが、まずは「知る」ことから始め、知識をもとに想像力を働かせることにより、配慮、助け合いのある世界をつくっていく一助となりたい。

優秀賞

耳栓に込めた願い

横浜市立岡津中学校　三年
山田（やまだ）　駿（しゅん）

僕の兄は耳栓をつけている。

予期しない音が苦手で、お守りがわりにつけているのだ。兄は聴覚過敏だ。「耳栓をつけていないとどうなの」と聞くと「嫌な音や声が聞こえてくると辛いし怖い」と言う。ひどい時は耳栓の上から耳を塞いで、その場から逃げるように違う場所へ移動する。家族が一緒にいるときは、そんな兄に誰かが付き添う。

耳栓を外す時は、誰もいない時、慣れた学校生活、寝る時だけらしい。少なからず、僕より音におびえながら生活しているだろうし、我慢している事が多い。ストレスがたまる毎日だろうなと感じる。

聴覚過敏とは感覚過敏のひとつで、ほかには視覚過敏、味覚過敏、嗅覚過敏、触覚過敏などがある。過敏とは、感受性が強すぎることで、聴覚過敏の場合、大きい音などを聞くと、私たちよりも苦しく感じるそうだ。

兄の苦手な音は、赤ちゃんの泣き声、キーキー騒ぐ声、犬の鳴き声、カチャカチャという食器らしい。楽しみたいのに、それらの音が怖くてどうしても外出を楽しむ事ができない。僕の家族は、それが分かっているから出かける場所や時間帯を極端に気にしてしまう。買い物に行くときはドキドキしながら静かな空間である事を願い店に入る。しかし、そんな訳がなく、兄にとっては爆弾のような音が店中に飛び交っている。僕の家族

はがっかりして急いで買い物を終わらせ、耳を塞ぎ始めた兄の背中を押して帰る。

それでも兄は出かけるのが好きだ。どこかに兄が安心できる場所はないだろうか。

以前、テレビ番組を見ていたら、感覚過敏の人が安心して買い物を楽しめる、「クワイエットアワー」という時間帯を、設けているデパートが紹介されていた。その取り組みは、店内の減灯、館内放送のカットなど、感覚過敏の人への配慮をしているのだ。僕の周りで聞いたことがなかったので調べてみると、二〇一七年にイギリスやオーストラリアのスーパーマーケットで始まり、評判が良く今はアメリカやフランス、日本にも広まっているそうだ。日本ではヤマダ電機やイオンなどの一部店舗で実施しているそうだ。僕は兄が音を怖がる事なく買い物を楽しめる場所があると知り、嬉しかった。

みなさんは感覚過敏の人の生きづらさをどう感じるだろうか。感覚過敏を治すことは難しいが、このような事を知ってもらい、そこから本人の辛い感覚を軽減できるアイデアが生まれてくると僕は考える。もしかしたら、特に過敏性がない僕たちにとっても、クワイエットアワーのような取り組み方が生活しやすいものになるかもしれない。

そして、何よりも大切な事は、感覚過敏は生まれ持った特性なのだから、無理強いはせずに、彼らが頑張りすぎている事を、周りが理解することが大切だと思う。また、過敏性の有無に関わらず、僕たちは様々な場面で、辛いと感じた時に支え合う事が当たり前であり続けてほしいと思う。

参加校紹介（124校）

■横浜市立

〔鶴見区〕
市場中学校
潮田中学校
上の宮中学校
寛政中学校
末吉中学校
鶴見中学校
寺尾中学校
生麦中学校
矢向中学校

〔神奈川区〕
浦島丘中学校
神奈川中学校
栗田谷中学校
菅田中学校
錦台中学校
松本中学校
六角橋中学校

〔西区〕
老松中学校
岡野中学校
軽井沢中学校

〔中区〕
大鳥中学校
仲尾台中学校
横浜吉田中学校

〔南区〕
共進中学校
永田中学校
藤の木中学校
平楽中学校
蒔田中学校
南中学校
六ツ川中学校

〔港南区〕
港南中学校
笹下中学校
芹が谷中学校
東永谷中学校
日限山中学校
南高等学校附属中学校

〔保土ケ谷区〕
新井中学校
岩井原中学校
岩崎中学校
上菅田中学校
保土ケ谷中学校

〔旭区〕
旭中学校
今宿中学校
希望が丘中学校
左近山中学校
都岡中学校
鶴ケ峯中学校
本宿中学校
万騎が原中学校
南希望が丘中学校
若葉台中学校
上白根北中学校

〔磯子区〕
汐見台中学校
浜森中学校
洋光台第二中学校

〔金沢区〕
金沢中学校
釜利谷中学校
小田中学校
大道中学校
富岡中学校
富岡東中学校
並木中学校
西柴中学校
六浦中学校

〔港北区〕
大綱中学校
篠原中学校
城郷中学校
高田中学校
樽町中学校
新田中学校
新羽中学校
日吉台中学校
日吉台西中学校

〔緑区〕
鴨居中学校
田奈中学校
十日市場中学校
中山中学校
東鴨居中学校
霧が丘義務教育学校

〔青葉区〕
青葉台中学校
あかね台中学校
あざみ野中学校
市ケ尾中学校
美しが丘中学校
鴨志田中学校
すすき野中学校
奈良中学校
みたけ台中学校
緑が丘中学校
もえぎ野中学校
山内中学校
谷本中学校

〔都筑区〕
荏田南中学校
川和中学校
茅ケ崎中学校
都田中学校
中川中学校
中川西中学校
早渕中学校
東山田中学校
秋葉中学校

〔戸塚区〕
汲沢中学校
境木中学校
大正中学校
戸塚中学校
豊田中学校
名瀬中学校
深谷中学校
〔栄区〕
桂台中学校
上郷中学校
西本郷中学校
本郷中学校

〔泉区〕
いずみ野中学校
岡津中学校
上飯田中学校
中和田中学校
領家中学校
緑園義務教育学校

〔瀬谷区〕
東野中学校
下瀬谷中学校
瀬谷中学校
原中学校
南瀬谷中学校

■その他
横浜国立大学教育学部附属横浜中学校

ご協力ありがとうございました。

●応募状況

年　度	令　　和				
	元年度	３年度	４年度	５年度	６年度
応募校数	137	127	131	129	124
作 品 数	55,914	55,079	53,434	55,470	55,323

※本作文集に掲載している作文は、明確な誤字等以外は原文のまま掲載しています。

●第43回全国中学生人権作文コンテスト横浜市大会

〈第一次審査員〉

横浜市立中学校教育研究会国語科部会　21名

〈第二次審査員〉

横浜市教育委員会事務局指導主事　10名

〈最終審査員〉

横浜市人権擁護委員会　会長	小林千恵子
横浜市人権擁護委員会第一ブロック委員	長島由佳
横浜市人権擁護委員会第二ブロック委員	藤田恵
横浜市人権擁護委員会第三ブロック委員	石井マサ子
児童文学作家	吉富多美
横浜市PTA連絡協議会　会長	東隆幸
横浜市立中学校人権教育推進協議会　会長	木村典明
教育委員会事務局人権健康教育部長	住田剛一
市民局人権担当理事	森智明

●協賛

横浜DeNAベイスターズ
横浜F・マリノス
横浜FC・ニッパツ横浜FCシーガルズ
横浜ビー・コルセアーズ
横浜キヤノンイーグルス

横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会

横浜市内における人権啓発活動を、関係機関の協力のもとに総合的かつ効果的に推進するために平成12年９月に設立。
構成：横浜市・横浜人権擁護委員協議会・
横浜市人権擁護委員会・横浜地方法務局

第43回全国中学生人権作文コンテスト
横浜市大会作文集

令和６年12月

横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会
TEL 045(671)2718(横浜市市民局人権課)
横浜市教育委員会事務局
人権教育・児童生徒課　TEL 045(671)3296